

Eleonora YOVKOVA-SHII

Liberal Arts and Sciences of University of Toyama

 <https://orcid.org/0000-0002-6121-1050>
e-mail: yovshii@las.u-toyama.ac.jp

Submitted: 30.10.2025

Accepted: 19.03.2026

Published: 15.07.2026

日本語文法の習得と教材の役割—
助詞「は」と「が」を事例に—
**Japanese grammar acquisition and the role of the
textbooks –
from the perspective of the particles *wa* and *ga***

ABSTRACT

This paper focuses on the role of the teaching materials for grammar acquisition in Japanese. One of the most difficult aspects in the acquisition of grammar for learners is distinguishing among the grammatical patterns that have similar functions. However, most of the textbooks created mainly in Japan do not provide sufficient information on how to distinguish similar grammatical patterns. The problem is that such textbooks are designed for the direct method of teaching multilingual classes and have limitations on the information they can present. Consequently, it is important to provide additional opportunities to learners by creating supplementary materials to fill in the areas that the main texts cannot cover. The discussion in this paper will be exemplified using the particles *wa* and *ga*. The arguments for the difficulties in the distinction between *wa* and *ga* are based on misuse examples extracted from the learners' corpora. The reason for dealing with *wa* and *ga* is that, although these particles are taught at the earliest stage of education, most of the learners have difficulties with the distinction between these particles, and even advanced learners often misuse them. Again, the descriptions of the functions of these two particles in the existing textbooks are inconsistent and vary from book to book. Finally, this paper introduces an online tool created to support the study of grammar and displays the description of *wa* and *ga* in it.

KEYWORDS: Japanese language education, grammar acquisition, particles *wa/ga*, teaching materials, supplementary resources



Creative Commons Attribution 4.0 International (CC-BY):
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/>

はじめに

日本語学習者にとって、習得や運用が困難な文法がある。日本語学習者が文法で特に困難と感じているのは類義表現の使い分けであるが、教材には、学習者が類義表現の理解や的確な運用に必要な情報が十分に提示されていない（ヨフコバ四位・稲葉・久保田 2020）。しかし、特に日本国内で広く使用されている教材の多くが、多国籍クラスのための「直接教授法」に基づく授業を想定し作成されているので、教材には詳細な内容や複雑な記述を提示することが難しいという事情もある。そのため、教室で使用されている教材で十分な対応がなされていない部分の補充をし、より深い学びを促すには、補助的学習リソースの開発が必要である。

本稿では、類義表現の使用で見られる学習者の誤用に着目し、誤用が、教材における類義表現の使い分けに必要な情報の不足に起因することを論じる。また、誤用の改善に役立つオンラインの文法学習支援ツールについて紹介する。学習者の誤用および類義表現の考察には、助詞「は」と「が」を事例として用いる。

1. 文法学習と教材の役割

外国語文法学習においては、文型の意味・機能の不十分な理解が不的確な産出につながる。文型の学習や適切な理解に関わる要因は様々である。

まず指摘できるのは、学習者の能力や語学学習経験である。これは学習者個人の問題であり、学習者にしかコントロールできない要因である。

次に指摘できるのは、学習指導の方法である。学習指導という要因の役割は非常に大きい。しかし、これも指導を行う側に委ねられており、個人差がある¹と言える。また、近年、自律学習が進んでおり、指導者に頼らず、独学で学ぶ学習者も増えている。

最後に指摘できるのは教材である。教材は、全学習者に同じような形で同じような情報を提供している。そのため、ここで取り上げられている要因の中で、最も客観性が高く、また学習への影響も客観的に測れる要因であるといえる。

¹ ここでいう個人差というのは、だれが何をどのように教えるかということの個人差という意味である。

本稿では、日本語文法の習得を教材と関連付けて考慮し、教材の役割について考察する。本稿で文法について特に焦点を当てたいのは類義表現である。類義表現が数多く存在するため、本稿では、助詞「は」と「が」を例にとり、考察を行う。

2. 「は」と「が」

「は」と「が」を考察の対象にする主な理由は二つある。

日本語教育では、助詞「は」と「が」は日本語文型の中で最も早い段階（初級のはじめ）で導入される文型の一つである。にもかかわらず、学習者にとってはこれらの助詞の使い分けや運用が困難であり、学習者が上級になっても誤用が多い。

さらに、どの教科書でも取り扱われている文法項目であるが、その記述や記述に使用される概念および意味的特徴が大きく異なり、一貫性がない。

2.1. 「は」と「が」の意味と用法

日本語学習者による「は」と「が」の習得について考察するまえに、従来の研究で、「は」と「が」の意味と用法がどのように記述されてきたか、簡単に確認しておく。

助詞「は」と「が」に関する研究は膨大である。また、分析に用いられるアプローチもまちまちである。

伝統的に、「は」と「が」は異なる性質を持つ助詞として分類されてきた。「が」は、「を」「に」「で」「と」などと同じ格助詞として分類されてきた。一方、「は」は格助詞のカテゴリーに含められず、異次元のもの、つまり、文の主題を表し、文を「主題」と「解説」に二分するという特別な機能をもつ助詞として分類されてきた。

「は」と「が」が同次元で比較されるきっかけをつくったのは久野（1973：27-28）の分類である。久野は、「は」と「が」の機能を文の情報構造と関連付けている。

久野は、「は」に関しては「主題」（1）と「対比」（2）の用法を区別している。

(1) 太郎は学生です。（久野 1973: 27）

(2) 雨は降っていますが、雪は降っていません。（久野 1973: 28）

一方、「が」に関しては、「総記」² (3)、「中立叙述」(4)、「目的語／目的格」(5)という三つの用法を区別している。

(3) 太郎が学生です。(久野 1973: 28)

(4) 雨が降っています。(久野 1973: 28)

(5) 僕は花子が好きだ。(久野 1973: 28)

久野の分類により、「は」と「が」を、文の構造における「旧情報」と「新情報」のマーカースとして捉える記述が広まった。久野の分類は、基本的に、機能に基づいた分類であるが、「が」の三つの用法に限っては、異なった基準、つまり統語的役割という基準が用いられている。

「は」と「が」の用法の区別に用いられるさらなる基準は、叙述(文)のタイプ、いわゆる「文の二元論」である(三尾 1948、野田 1996)。それにより、文は大きく二種類、つまり「判断文」と「現象文」³に分けられている。前者には「は」、後者には「が」が用いられる。野田(1996)は、「現象文」と「眼前描写」を区別し、「無題文」の下位タイプとして分類している。また、「現象文」と「眼前描写」は重なることもあるが、同じではないと主張する。尾上(2001)は、従来指摘されてきた「が」の用法に、さらに「問い返し」／「驚き」という用法⁴を加え、その例として、以下の(6)を挙げている。

(6) A: 見ろよ。こんな大きなねずみを取ったよ。

B: 大きくはないよ。小さいよ。

A: このねずみが小さい↗?

名詞文における「は」と「が」の振る舞いが特殊である⁵ため、名詞文(コピュラ文)に特化した研究が数多くある。名詞文は、「は」と「が」の機能により、「措定文」(7)、「指定文」

² 「排他」ともいう。

³ 「眼前描写」ともいう。

⁴ 尾上は、このタイプの用法について次のように説明している：話者は「相手の発言内容の中核的部分を一旦自分の言葉に直して受け止め、文末のイントネーションとともに相手に投げ返して、驚き、不信などを表す」(2001: 20)。

⁵ 例えば、名詞文には無題文がなく、すべての文は有題文である。

(8)、「倒置指定文」(9)というタイプに区別されている(三上 1953、上林 1988、天野 1995)。

- (7) 田中さんは医者である。
- (8) 田中さんが医者である。
- (9) 医者は田中さんである。

このように、「は」と「が」の機能・用法の記述や分類は様々であり、時には同様の機能・用法が異なった概念をもとに記述されることがある。

本稿では、両助詞の対等な比較を行うために、同一の統語的機能に注目し、主語(主格)を示す「は」と「が」のみについて考察する⁶。また、単文(主節)を中心に議論を進めるが、学習者の誤用を論じる際に、複文にも触れる。

従来の研究において同一現象の記述に用いられる「無題文」、「中立叙述」、「眼前描写」、「現象文」といった多様な概念の使用で生じ得る誤解釈を避けるため、本稿では、これらのタイプの文における「が」の用法を「中立叙述」として整理し、述べる。

2.2. 学習者の誤用

日本語教材に提示される「は」と「が」について考察する前に、これらの助詞の使用で見られる学習者の誤用について見ておきたい。学習者の誤用については、学習者コーパスから抽出した例をもとに、誤用パターンを検証する。学習者の誤用の検証に用いるデータベースは以下のとおりである。

- ・『寺村誤用例集データベース』⁷
- ・『多言語母語の日本語学習者横断コーパス(IJAS)』⁸(中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03)

⁶主語以外の項の主題化に使われる「は」、目的格として使用される「が」、また「は～が」文は本稿の考察には含めない。

⁷「同用例集は、諸外国からの留学生が書いた作文に見られる日本語の誤用を収集・分類したもので、1985～1989年度の科学研究費補助金特別推進研究『日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究』の一環として行われた『外国人学習者の日本語誤用例の収集・整理と分析』の資料をまとめた報告書とのことです。」(HPより)。

⁸「日本を含む20の国と地域で、異なる12言語を母語とする日本語学習者1000人の話し言葉および書き言葉を横断的に調査し、データを収集したコーパスです。コーパスの名

「は」と「が」の誤用には 2 つのパターン、つまり「は」を使うべきところで「が」を使っているということと、「が」を使うべきところで「は」を使っているということがあるが、本稿では以下のように分けて考察する。

A: 単文の主語

- 1) 「は」を使うべきであるが、「が」を使っている
- 2) 「が」を使うべきであるが、「は」を使っている⁹

B: 複文の従属節（埋め込み文）の主語

- 3) 「が」を使うべきであるが、「は」を使っている

用例においては、誤用を [] で示す。「は」と「が」以外の誤用は改変せず、原文のまま（ママ）に示す。〈〉に学習者の国籍を示す。

では、具体例を見てみよう¹⁰。

(10) ～ (13) には、「は」を使うべきところで「が」を使っているという誤用例を示す。

- (10) 私 [が] もっと深い学問をほしい（ママ）ために日本へ来た。（『寺村誤用例集』〈台湾〉）
- (11) 最近の勉強と論文を書くこと [が] いかがですか。（『寺村誤用例集』〈台湾〉）
- (12) ヤンさん [が] かとうさんの奥さんに冷いお茶をもらって、飲んだあと（ママ）気持ちがよくなった。（『寺村誤用例集』〈中国〉）

称は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』、略称は『I-JAS (International Corpus of Japanese as a Second Language)』です。」(HP より)。以下 IJAS と呼ぶ。

⁹ 文が使われている文脈抜きではどちらの助詞が適切かの判断が難しい（どちらも使える）場合がある。本稿で使用するコーパスでは、文が使用されている文脈を明確に示している文章の情報も掲載されているので、助詞の正用／誤用の判断の際、文章の確認も行っている。

¹⁰ 『寺村誤用例集データベース』を事例に見ると、「は」を使うべきところで「が」を使っているという誤用と「が」を使うべきところで「は」を使っているという誤用はほぼ同じ割合で、540 例中、それぞれの誤用の例が 140 例ずつ確認できた。

- (13) 私たちの部屋 [が] 2階にあります。(『寺村誤用例集』
〈フィンランド〉)

以下、上記の例の誤用の要因について若干の考察を加えたい。

(10) の文は作文の冒頭に使われている文である。この文は、「主題」と「解説」に二分される構造の例であるため、主題である「私」には「は」の使用が適切である。では、「が」の誤用には一体どのような原因が考えられるのだろうか。断定は難しいが、一つの可能性として考えられるのは、指導でよく言われる「初出の主語に「が」を使う」(cf. 表 1 *Japanese for Busy People* の解説) という説明の影響である¹¹。

(11) は、上記の四例の中で、唯一の名詞文(コピュラ文)であるが、この文も明確な二分構造の文である。一方、疑問詞を含んでいることで他の文と異なり、二分構造における「旧情報」と「新情報」の部分の見極めは容易なはずである。しかし、教室活動でもしばしば見られる疑問詞を含んだ文における「は」と「が」の誤用¹²から、学習者が疑問詞を含んだ文の構造、またその構造における「は」と「が」の役割を理解していないということがうかがえる。

(12) は並列関係にある複文であるため文の構造パターンは(10)と同じである。

(13) は、主格に「は」を使うべき所在文である。所在文と存在文は普遍的な構文であるが、日本語学習者にとってはなぜかこの二つの構文の区別が難しく、助詞の使用で誤用が多く見られる。その原因の一つには教科書の影響が考えられる。特に日本国内でよく使用されている教科書では、この二つの構文は別々の課で導入されることが多い¹³が、構造の関連性に気付かせる情報が教科書には提示されていない。また、教材によっては、所在文の課と存在文の課が離れており、存在文が導入されている頃には、学習者が導入済みである所在文のことを忘れていることもある。教材について論じる 2.3.

¹¹ ただ、この文は、(12) 同様に、従属節を含んでいる複文であるため、文全体の特徴を考えず、複文の主語に「が」を使わなければならないというルールのみを考え、学習者が「が」を使用したという可能性も否定できない。

¹² 教室活動で最も多く見られる疑問詞を含んだ文の誤用は、「だれは～／なには」のように、疑問詞主語に「は」を使うというパターンである。

¹³ たとえば、『できる日本語』(2011)や『まるごと』(2013)。導入の手順が教科書によって異なり、存在文が導入されてから所在文が導入される場合もあれば、逆の場合もある。

で改めて所在文と存在文の問題について考察する。

『寺村誤用例集データベース』には、対比の「は」の誤用例¹⁴もいくつか掲載されているが、ほとんどの例は非主語の例であるため、ここでは取り上げない。

次に、教室活動の中でも多く見られる2)（「が」を使うべきところで「は」を使っている）の誤用パターンについて見てみたい。

- (14) 文化てきなたてもの [は] たくさんあります。（『寺村誤用例集』〈イラン〉）
- (15) こんなはなし時間（ママ） [は] 一番うれしかったです。（『寺村誤用例集』〈台湾〉）
- (16) バasketを开けると、犬 [は] 飛びます。（『IJAS』〈英語話者〉）

(14) が使われている文脈¹⁵から、この文は、主語に「が」を用いるのが適切な「中立叙述」の文である。(15) は、久野 (1973) の分類における「総記」（「排他」）にあたる用法である。(14) にも (15) にも「が」ではなく、「は」が使われている主な要因として考えられるのは、「は」のなじみやすさである¹⁶。さらに、学習者が「が」の使用を決定づける文の構造（「が」を使う条件）を十分に理解していないということも指摘できる。

(16) の用例は IJAS のコーパスから抽出した例である。IJAS の用例集には、絵に関する作文（ストーリーテリング）が複数収録されている。その一つは、図 1 にある絵のストーリーテリングである。

(16) はその絵の場面④について作成された文である。以下に、IJAS にある母語話者の作文をもとに、ストーリーテリング 1 「ピクニック」について期待される内容と場面④の記述を例示する。

¹⁴たとえば、「かんじ [が] かけますが、よみかたはできません。」（『寺村誤用例集』〈マレーシア〉）。

¹⁵ この文は、「昔、イランの首都には文化的な建物がたくさんありました」という文脈で使われている。（<https://www2.ninjal.ac.jp/teramuradb/compositions/12.01.02.html>）

¹⁶ 教科書では、主語(主格)に「は」が使われることが多い。

「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました。二人は地図を見て、今日向かう場所について話し合っています。そのため飼っている犬がサンドイッチのバスケットに入ってしまったのに気付きませんでした。今日はいい天気で、二人はピクニックを楽しみました。しかし、いざお昼ご飯を食べようとしてバスケットを開けると、なんと飼い犬が飛び出してきたのです。バスケットの中を見ると、残念なことに作ってきたサンドイッチはすべて食べられていました。」（IJAS【日本語母語話者】）。

（16）では、母語話者の作文に見られるように、主語（下線の文の中の主語）に「が」を使うべきである。その「が」は、特殊な用法の「が」であり、尾上（2001）が指摘する「驚き」の「が」である。このタイプの「が」の用法に関しては、教科書にはほとんど情報がなく、学習者には認識されにくい。



図1「ピクニック」

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas>

最後に、複文について簡単に見ておきたい。初級では複文はほとんど扱われないので、複文の従属節（埋め込み文）における主格助詞の使い方についても指導がなされない。しかし、学習者が上級になっても、複文における主格助詞の誤用が多い。また、最も多く見られる誤用は、主節と従属節の主語が異なる場合に、従属節（埋め込み文）の主語に「が」ではなく「は」が使われているものである。以下に例を示す。

- （17）私は、来年の大学費〔は〕たりないために夏休の前に、アルバイトを探がして行きました。（『寺村誤用例集』〈台湾〉）
- （18）しかし、国の両親〔は〕日本へ来る予定があったのだ（ママ）から、私は国へ帰りませんでした。（『寺村誤用例集』〈台湾〉）

- (19) あの女は、ヤンさん [は] えきの前 (ママ) でんわしたとき
あた (ママ) 人です。 (『寺村誤用例集』 〈スリランカ〉)
- (20) もし、人々 [は] ブティーアナを養えば、生活が幸福になる
と言われる。 (『寺村誤用例集』 〈マレーシア〉)
- (21) 私 [は] 以前から関心を持ってきたことは国の経済発展と成
長である。 (『寺村誤用例集』 〈インド〉)

2.3. 教科書における「は」と「が」の扱い

「は」と「が」の使い分けは学習者にとっては難しい。類義表現の使い分けの困難さの背景には様々な要因がある。一般的に指摘されている要因の一つは、学習者の母語の影響である (市川 2006)。学習者の母語の影響は否定できない大きな要因ではあるが、上記の誤用の例からもわかるように、誤用は、様々な母語を持つ学習者¹⁷に共通して生じる。

本稿では、母語の影響を考察の対象外とし、学習指導において重要な役割を果たす教材に焦点を当て、教材の観点から誤用の要因を明らかにすることを試みる。

一般的な学習過程¹⁸では、「は」は 1 課で導入され、しばらくしてから「が」が導入される¹⁹が、多くの教科書の場合、主格に用いられる「は」と「が」の初出の課が離れている。

外国語学習で、一つの意味・機能に対して複数の文法形式の使用が学習者を困惑させる原因となっている。そのため、「は」と「が」の場合も、「が」が導入されると、学習者から「『は』と『が』は何が違いますか?」と、しばしば聞かれる。学習者の疑問は、教科書には「は」と「が」の類似または相違に関する情報が十分に提示されていないということに深く関係している。

では、日本語教材 (総合教科書と学習者向けの解説書) には「は」と「が」についてどのように提示され説明されているのか、簡単に見てみたい。

¹⁷ 上記の例を抽出したコーパスに収録されている例を作成した学習者の主な母語は以下の通りである: インドネシア語、スペイン語、タイ語、トルコ語、ドイツ語、ハンガリー語、フランス語、ベトナム語、ロシア語、英語、韓国語、中国語、ポルトガル語、ペルシャ語、マレー語、フィンランド語。

¹⁸ ここでいう一般的な学習課程というのは、教室環境で特定の教科書を用いて、「易>難」という難易度を上げていくいわゆる「積み上げ式」の学習課程のことである。

¹⁹ 「が」が導入される課は教材によって異なる。

学習者向けの教材には、日本語学で用いられている記述方法および専門用語（概念）は当然使えない。しかし、翻訳を提示している教材であれば、より複雑な記述が可能である。以下の表 1、表 2 に、いくつかの教材の例を示す。教科書の考察には、『みんなの日本語 初級I 翻訳・文法解説英語版 第 2 版』（2013）、坂野他『げんき』（2013）、国際日本語普及協会 *Japanese for Busy People (JBP)* (2008) を用いる。解説書については、友松・和栗『初級日本語文法総まとめポイント 20』（2004）、グループジャマシイ『日本語文型辞典』（2015）、Makino & Tsutsui *A Dictionary of Basic Japanese Grammar* (1986)、Maynard *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies* (1990) を参照する。教科書に関しては表 1、解説書に関しては表 2 にまとめる。

表 1 が示しているように、「は」の解説がない教科書もある。一方、「が」の記述には一貫性がなく、あるものには統語的役割（主語）、別のものには語用論的機能（情報のタイプ）が用いられ解説されている。また、「が」に関しては、多くの教科書では、存在文のみにフォーカスが当てられ、存在文での機能に特化した記述がなされている。*Japanese for Busy People* には、用例を用いて「は」と「が」の比較を行っているという、他の教科書に見られない特徴がある。

教科書名	課	文型（用例）	解説
みんなの日本語	L.1	N ²⁰ は～です	は ²¹ indicates that the word before it is <u>the topic</u> of the sentence
	L.10	Nがあります／ Nがいます	the thing or person is treated as the <u>subject</u> and marked with <u>が</u>
げんき	L.1 L.8	Nは～です QW が V ²² 「ロバートさんが沖縄に行きました。」	※「は」の解説無し ・ <u>the question word which is the subject is never followed by は</u> ; with <u>が extra emphasis is made on</u>

²⁰ N は主語の名詞（Noun）を指す。

²¹ 表 1 と表 2 にある下線は本稿の筆者によるものである。

²² QW は疑問詞、V は動詞を指す。

		「だれが【×は】沖縄に行きましたか？」	Robert, <u>the new piece of information</u> * 「ロバートさんは沖縄に行きました。」 <u>describes what Robert did</u>
<i>Japanese for Busy People</i>	L.8	～に N があります／ N は～にあります 「1 かいにレストランがあります。／ 「レストランは 1 かいにあります。」	<u>が</u> : <u>subject marker</u> <u>the subject is introduced for the first time; the speaker believes the information to be new to the listener</u> ※「は」の解説無し

表 1 教科書における「は」と「が」の記述

次に、解説書（文法練習帳、文法辞典）における記述について見てみたい。学習者だけを対象としている参考書や文法辞典は少ない。また、初級に特化している参考書や文法辞典も少なく、一般的に日本語読解力が高い読者層向けのものが多い。

参考書や文法辞典では、「は」と「が」は、多くの場合、その語用論的役割、すなわち情報のタイプとの関連から記述されている。疑問文を用いて、両助詞の用法を比較しながら情報構造の違いを示そうとする解説書（*An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies*）もある。

書名	文型（用例）	解説・意味の記述
初級日本語文法総まとめ ポイント 20 （2 課）		・伝えたい情報の前に「は」を使う（<u>取り立て、対比</u>） ・伝えたい情報の後に「が」を使う（<u>描写、～は～が文、複文</u>）
日本語文型辞典	だれが／【×は】来ますか	<u>が indicates that the noun is the subject</u>
<i>A Dictionary of Basic Japanese Grammar</i>	だれが／【×は】来ますか	・ <i>wa</i> marks a <u>topic</u> or a <u>contrastive element</u> ; the speaker assumes that <u>the</u>

		<u>hearer knows the referent of wa</u> ・ <u>ga : focus, subject</u>
<i>An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies</i>	Q: どの人がスミスさんですか。 A: あの人がスミスさんです。 Q: スミスさんはどの人ですか。 A: (スミスさんは) あの人です。	contrasting wa and ga

表 2 解説書における「は」と「が」の記述

日本語学習者にとっては、「は」より、「が」の運用のほうが難しい。それには複数の理由がある。一つは、教材では、一般的には、主語に「は」が用いられることが多く、学習者にとっては「は」の方が馴染みがある。もう一つは、「が」は機能が多く、学習者が複数の機能の区別で混乱する。さらに、有標性の観点から見ると、「は」は無標に近い形式であるのに対し、「が」は有標な形式として捉えられる。そのため、「が」は「は」よりも使われ方が限定的である。

では、「が」の用法が教科書ではどのように提示されているか、日本国内の日本語の授業で最も多く使用される『みんなの日本語 初級』（2012）を事例に考察したい。考察の結果は表 3 にまとめる。

課	用法（構文）	用例
10	存在文 (NにNがある／ NにNがいる)	・ 机の上に写真があります。 ・ あそこに佐藤さんがいます。
27	①Nができる ②NがNです	①駅の前に大きいスーパーができました。 ②日曜大工が趣味です。
29	アスペクト構文 (Vテイル)	窓が閉まっています。
30	アスペクト構文 (Vテアル)	地図がはってあります。
32	自然現象の描写	あした、雨が降るでしょう。

35	①自然現象の描写 ②N がいいです。	①春になれば、桜が咲きます。 ②北海道旅行なら、6月がいいです。
----	-----------------------	-------------------------------------

表3『みんなの日本語』（初級）に出現する主格の「が」の用法

表3が示しているように、『みんなの日本語』では、「が」の導入は構文のタイプに沿ってなされている。一方、表1の教科書における「は」と「が」の記述では「主語」という概念が一般的に用いられている。しかし、同じく主語に関わる「は」との違いについては言及がない。

日本国内で作成されている教科書の著者は基本的に日本語母語話者であるため、文法の記述は母語話者の視点からなされている。そのため、提示されている情報が必ずしも学習者のニーズに合っているとはいえない（ヨフコバ四位・稲葉・久保田2020）。特に、学習者が最も知りたい類義表現の違いや使い分けに必要な情報が教材には十分に提示されていない。

では、海外の場合はどうなっているのだろうか。

海外では、多くの教科書の作成に非母語話者教員が携わっており、著者自らの学習経験を活かした教材作りがなされているということが報告されている（ヨフコバ四位・久保田・稲葉2021、ヨフコバ四位・稲葉・久保田2022）。そのため、類義表現に関しては同じ課の中で提示されることが多い。以下では、スペイン（*El japonés fácil* 2004）とウズベキスタン（*Yapon tili*, Xalmurzayeva 2005）の教科書における「は」と「が」の提示方法について取り上げる。

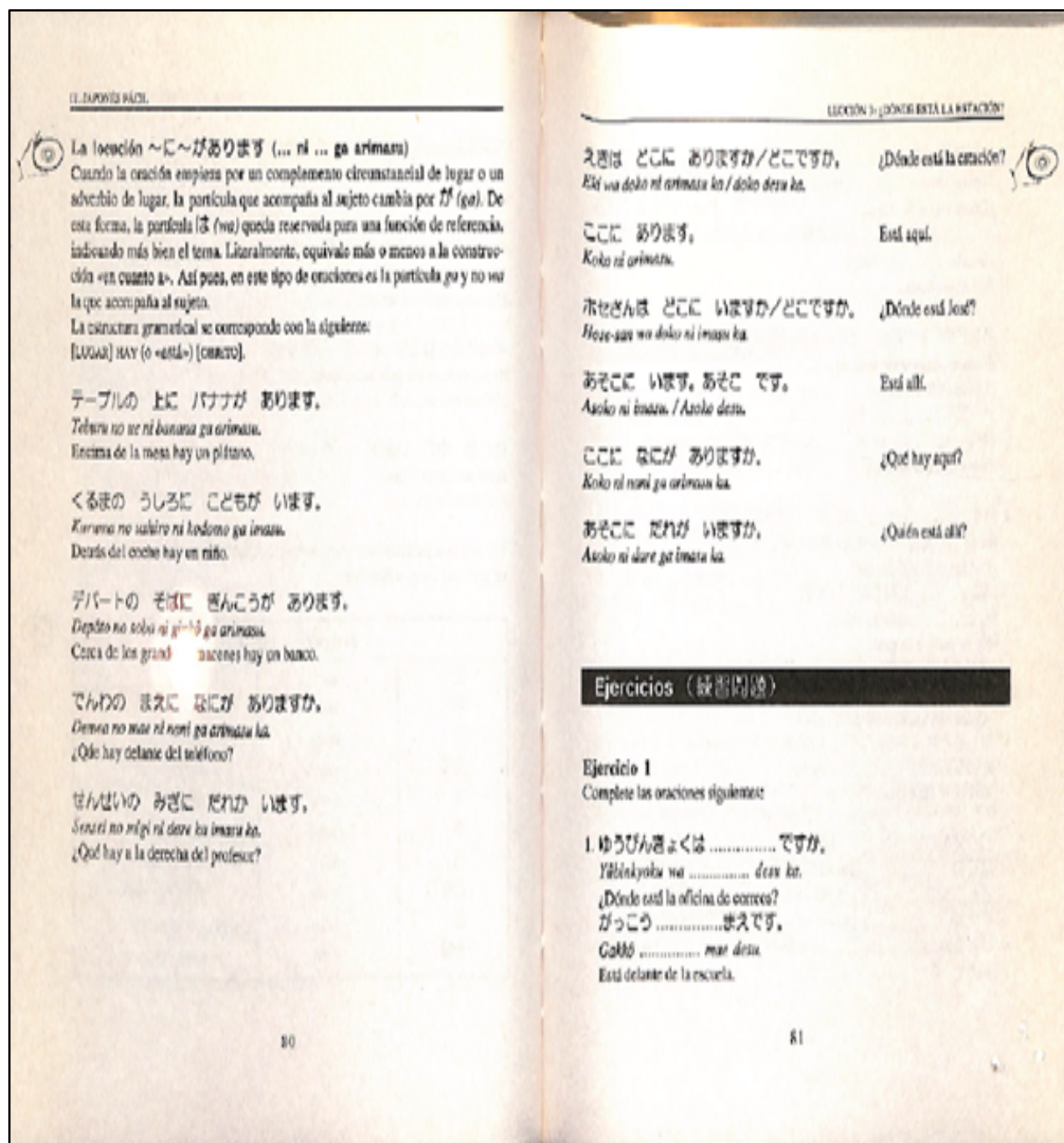


図 2 *El japonés fácil* (2004) における助詞「は／が」(所在文、存在文)
(ヨフコバ四位・久保田・稲葉 2021: 89)

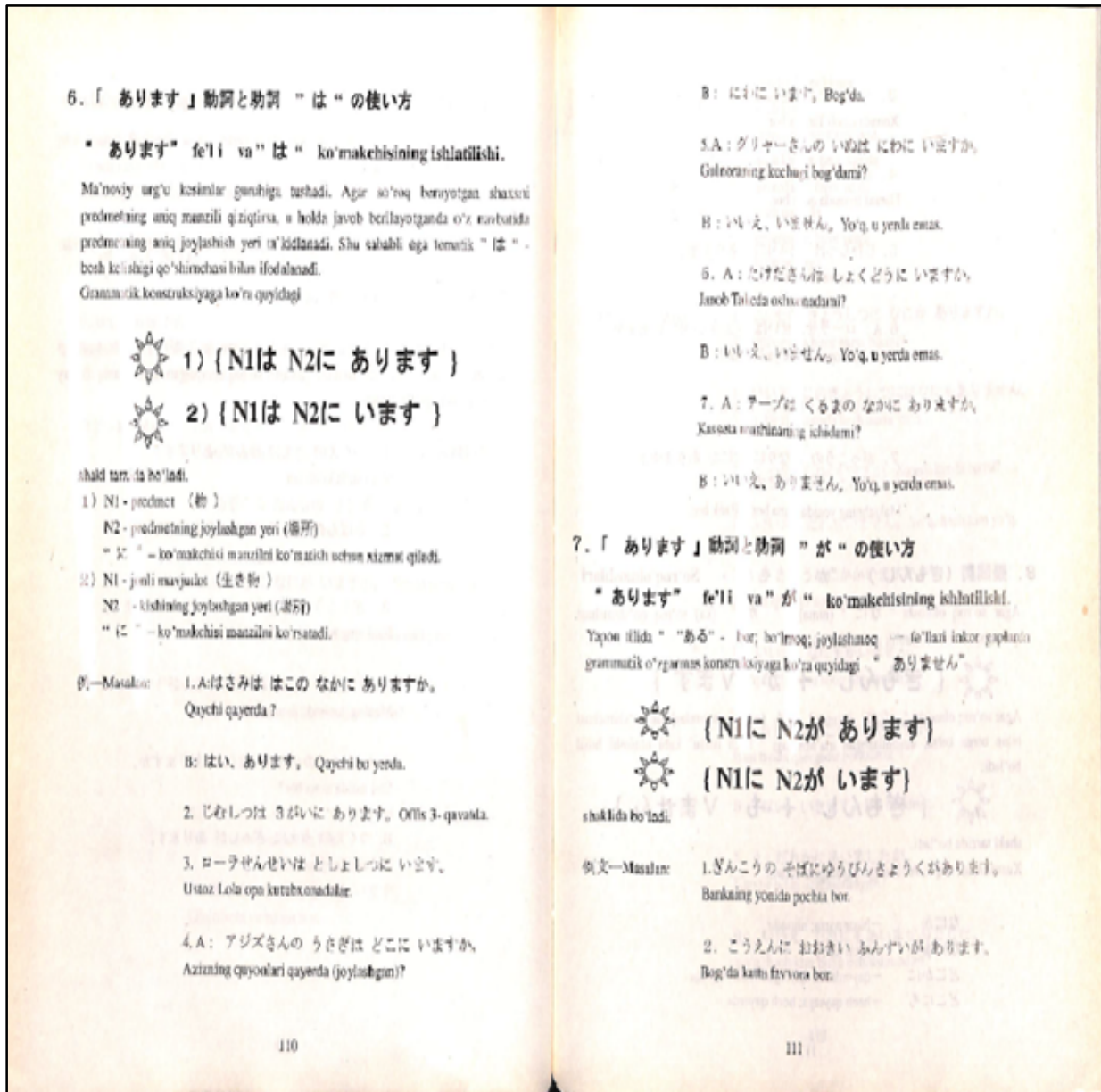


図3 Xalmurzayeva, *Yapon tili* (2005) における助詞「は／が」(所在文、存在文)
(ヨフコバ四位・稲葉・久保田 2022: 99)

スペインとウズベキスタンの教科書では、所在文と存在文が同じ課の中で出現し、特に、ウズベキスタンの教科書に明確に見られるように、これらの構文における「は」と「が」の使用の違いを意識させるために、構文が並行して提示されている。

海外の教育現場では、学習者の母語が使用できるため、直接法によって教育が行われている日本国内の教育現場に比べ、学習者への文法の説明においてより大きな活用の可能性を有する。

3. 補助教材の役割

近年、学習者が教科書以外のツール、主としてインターネットから情報を得ることが多くなってきている。インターネットは利便性が高いが、問題点もある。たとえば、検索によって得られる情報の信憑性などである。また、文法について説明を提供しているサイトが多数あるが、その中のどれが自分のニーズに合い、有益であるかを見極めることは学習者にとって難しい。さらに、文法に関しては、断片的な情報の提示が多く、文法全体の体系が見えてこない。

次に、補助教材の役割を考えつつ、文法を体系的に記述し、また学習者のニーズに配慮したオンラインツールを紹介したい。また、そのツールにおいては「は」と「が」がどのようになされているかについても確認する。

文法の学習（自律学習も含めて）を支援するオンラインで利用できるリソースが増えている。例えば、『日本語文型バンク』、『機能語用例文データベース「はごろも」』などである。『はごろも』は、データ駆動型学習（Data Driven Learning, DDL）のツールとして開発され、文法の産出活動を支援するツールである。『はごろも』は、学習者自身がコーパスから抽出した豊富な例文を見て言語の特徴に気づくという学習者主体の問題解決学習を支援することを目的としている。そのため、文型の用法を理解するために必要な用例が多数提示されているという大きな利点がある。一方、中上級以上の学習者を主な対象としているため、初級の学習者にはやや難しい。

4. 『日本語参照文法』

初級のみを対象とした、オンラインで利用できる文法の補助教材はまだ少ない。また、特に不足しているのは、学習者のニーズが高い類義表現の使い分けについて情報を提供しているリソースである。このような状況を改善すべく、近年、『日本語参照文法』（<https://sansyo-bunpo.net/>）が開発された。以下、『日本語参照文法』の特徴について紹介する。

4.1. 『日本語参照文法』の特徴

『日本語参照文法』には大きな特徴が三つある。一つは、オンラインで無料で利用できるため、多様な学習環境にいる多様な学習者が自らの都合（学習時間や学習場所）に合わせ、学習できるという利点である。もう一つは、文型の記述は、その使用にあたり、理解が必要な意味や用法を、類似する他の文型との比較の観点からなされているということである。さらにもう一つは、便利な翻訳機能が付いているということである。翻訳にはGoogleの自動翻訳が使われ、図4に示すような形で、ページの内容を翻訳できる。



図4 Google 翻訳による翻訳のための画面

初級の文法教材の開発を困難にしている原因の一つが学習者の読解力であるため、翻訳機能を備えることによって、リソースの利便性や価値が高まる。『日本語参照文法』は、130 か国語への翻訳が可能であるため、多様な学習者が文法の説明を母語で読むことができる²³。図5には、「が」のページの一部とそのポーランド語訳（ポーランド語訳は不完全な部分がある）を示している。

²³ 翻訳には自動翻訳機能が使われているため、言語によって翻訳の質が異なり、不完全な翻訳もあるが、大凡の意味が伝わるため、日本語の知識を十分に有していない学習者にとっては有益である。

11[が]（助詞）① 基本情報 1. 旧JLPT該当級：4 2. 品詞：助詞【用語の説明】①[助詞] 3. 前接：N（名詞）【用語の説明】 4. 意味：1 主格（主語） 2 動きの対象（目的語） 【用語の説明】 使い分けが必要な文法・文型 ・ 1 助詞「は」 88[は] ・ 2 助詞「を」 120[を] 文型を使う上で理解が必要な情報 ・ 新しい情報／古い情報 主語＝古い情報／述語＝新しい情報 主語＝新しい情報／述語＝古い情報	11 [ga] (cząstka) ① podstawowe informacje 1. Stary poziom JLPT: 4 2. Część mowy : Partykula [Wyjaśnienie terminu] ① [Partykula] 3. Prefiks: N (rzeczownik) [Wyjaśnienie terminu] 4. Znaczenie: 1. Mianownik (podmiot) 2. Obiekt czynności (dopełnienie) [Wyjaśnienie terminu] Gramatyka i wzorce zdań wymagające innego zastosowania ・ 1 cząstka „wa” 88 [ja] ・ 2 cząstka „wo” 120 [wo] Informacje, które musisz zrozumieć, używając wzorców zdań ・ Nowe informacje / Stare informacje Podmiot = Stare informacje / Orzeczenie = Nowe informacje Podmiot = Nowe informacje / Orzeczenie = Stare informacje
--	--

図5『日本語参照文法』の「が」のページとそのポーランド語訳

4.2.『日本語参照文法』における「は」と「が」の記述

本稿では、「は」と「が」を中心に、類義表現の習得の問題および教科書における記述について見てきたので、最後に、『日本語参照文法』に提示されている「は」と「が」の記述の特徴について見てみたい。

『日本語参照文法』には、初級の120の項目の情報が収録されている。それぞれの項目の記述ページには次のような内容が記載されている（文型によって記載内容が異なる場合もある）。

- ・ 基本情報
- ・ 使い分けが必要な文法・文型
- ・ 文型を使う上で理解が必要な情報
- ・ 機能（複数の機能の場合は、機能1、機能2・・・のように、機能ごとに記述されている。）
 - ・ 機能（または用法）の用例
 - ・ 使い分けが必要な文法・文型
 - ・ 使い分けが必要な文法・文型の用例
 - ・ 使い分けが必要な文法・文型の違い
- ・ 誤用例

では、簡単に「は」と「が」のページの内容を見てみよう。
ページの冒頭（図 6-1,6-2）には、「基本情報」が掲載されている。
また、使い分けが必要な他の文法項目も提示されている。「は」の場合は助詞「が」と「を」であり、「が」の場合は助詞「は」と「を」である。

2.1.で論じたように、専門書などでは、「は」と「が」の記述には様々な概念が用いられている。また、教科書の分析が示したように、教材にも「は」と「が」の記述には一貫性がない。一方、学習者が文法の学習や運用の手がかりとして求めているのは「ルール」である。そのために、多様な用法を持つ文型を記述する際、包括的に記述できる概念の提示が重要であると考え。『日本語参照文法』では、その概念を、「は」と「が」について、「古い情報／新しい情報」として用いている。

88[は]

基本情報

1. 旧JLPT該当級：4
2. 品詞：助詞【用語の説明】①[助詞]
3. 前接：N（名詞）【用語の説明】
4. 意味：1 主題・主語（主格）
2 対比
3 総称

使い分けが必要な文法・文型

- ・ 1 助詞「が」 11[が]①
- ・ 1 助詞「を」 120[を]

文型を使う上で理解が必要な情報

- ・ 新しい情報／古い情報
主語＝古い情報／述語＝新しい情報
主語＝新しい情報／述語＝古い情報

11[が]（助詞）①

基本情報

1. 旧JLPT該当級：4
2. 品詞：助詞【用語の説明】①[助詞]
3. 前接：N（名詞）【用語の説明】
4. 意味：1 主格（主語）
2 動きの対象（目的語）
【用語の説明】

使い分けが必要な文法・文型

- ・ 1 助詞「は」 88[は]
- ・ 2 助詞「を」 120[を]

文型を使う上で理解が必要な情報

- ・ 新しい情報／古い情報
主語＝古い情報／述語＝新しい情報
主語＝新しい情報／述語＝古い情報

図 6-1 『日本語参照文法』の
「は」のページの冒頭

図 6-2 『日本語参照文法』の
「が」のページの冒頭

『日本語参照文法』では、「は」「が」の機能について、まず統語的アプローチ（文における項の統語的役割）に基づき、「主格＝主語」と「対格＝目的語」（「が」の場合）という機能が区別されている（図 7-1、7-2、7-3）。

図 7-1 『日本語参照文法』の「は」の機能 1

機能1：主語（主格）

用法1★：主語（主格）＝新しい情報

主語＝新しい情報 [が] ／ 述語＝古い情報

機能1用法1用例：

例1．田中さんが先生だ。

例2．子どもがにわで遊んでいる。

機能1用法1と使い分けが必要な文法・文型：

・助詞「は」

機能1用法1と使い分けが必要な文法・文型の用例：

例3．田中さんは先生だ。

例4．子どもはにわで遊んでいる。

機能1用法1と使い分けが必要な文法・文型の違い：

助詞 [が]：①主語＝新しい情報（主語にQW）／ 述語＝古い情報

②文＝新しい情報

①田中さんが先生だ。 ← だれが先生？

主語 述語

新しい情報 古い情報

①子どもがにわで遊んでいる。 ← だれがにわで遊んでいる？

主語 述語

新しい情報 古い情報

②子どもがにわで遊んでいる。 ← 何が起きている？

新しい情報

助詞 [は]：主語・主題＝古い情報／ 述語＝新しい情報（述語にQW）

田中さんは先生だ。 ← 田中さんは何？

主語 述語

古い情報 新しい情報

子どもはにわで遊んでいる。 ← 子どもは何をしている？／子どもはどこで遊んでいる？

主語 述語

古い情報 新しい情報

用法2★★：おどろき

機能1用法2用例：

例5．あっ、ねずみがいる！ ← おどろき

図 7-2 『日本語参照文法』の「が」の機能1

機能 2 ★：動きの対象（目的語）**機能 2 用例：**

- 例 6．田中さんは**歌**が上手だ。
 例 7．わたしは**くだもの**が好きだ。
 例 8．わたしは**水**が飲みたい。
 例 9．アンさんは**日本語**ができる。
 例 10．ヤンさんは**日本語**がわかる。

機能 2 と使い分けが必要な文法・文型：

- ・助詞「を」

機能 2 と使い分けが必要な文法・文型の違い：

※一般的に、動きの対象に助詞「を」を使う。

- 例 11．くだものを食べる。
 例 12．日本語を話す。
 例 13．水を飲む。

※対象に助詞「が」を使うのは次の場合：

- ①能力を表す形容詞（上手、下手、得意、苦手 など）⇒ 例 6．
- ②感情を表す形容詞（好き、きらい、ほしい など）⇒ 例 7．
- ③Vたい ⇒ 例 8．
- ④可能V（できる、Vれる／Vられる など）⇒ 例 9．
- ⑤感覚V（見える、聞こえる、わかる など）⇒ 例 10．

図 7-3 『日本語参照文法』の「が」の機能 2

そして、「主語」に関しては、情報構造（古い情報／新しい情報）の特徴に基づき、「は」と「が」は対比して記述されている。

「古い情報／新しい情報」という概念を用いれば、学習者の用例に多くの誤用が見られた、「が」によって表される「驚き」（「が」の機能 1 用法 2）という用法も包括的に記述できる。「驚き」と「新情報」の間には、一見、関係がないように思われるが、「認識できていない情報」（‘unprepared mind’²⁴, Slobin & Aksu 1982）と関連付ければ、説明が付く。

「新情報／旧情報」という概念は、「が」と「は」の多様な働きを記述するのに有効な概念である。また、「が」と「は」を類義表現

²⁴ Slobin & Aksu (1982) の考察によれば、発話時において、聞き手（読み手）の意識が語られているできごと（または、できごとに関する情報）を受け入れる準備ができていない（‘unprepared mind’）場合は、そのできごとの情報（「驚き」、「発見」、「不信」、「不満」など）も「未知」（つまり、「新情報」）として認識されるということである。

として包括的に記述できる利点があり、まさに学習者が求めている「ルール」なのである。

学習者の作例からも明らかになったように、誤用の多くは学習者が文の情報構造を理解していないということに起因する。そこで、学習者に情報構造について知識を与え、また、「は」と「旧情報」、そして「が」と「新情報」の関連性を認識させれば、「は」と「が」の学習効果が上がり、誤用が減るのではないかと考える。

情報のタイプという概念は初級の学習者にとっては決して理解しやすい概念ではないが、リソースには翻訳の機能が備えられているからこそ、このような記述方法が可能だと思われる。

『日本語参照文法』の翻訳ページには、原文の同時表示も可能である（図 8）ため、学習者は、翻訳文を読みながら原文の説明や用例を確認できる。

『日本語参照文法』のように、翻訳機能を備えたリソースであれば、難しい概念も、翻訳を通して、学習者に伝えることができる。補助教材の役割はこのような学習支援にこそあるのではなかろうか。

日本語の 4 技能の学習について学習者を対象に実施されたアンケートでは、文法の学習において、類義文型をまとめて学びたいと考える学習者が極めて多いことが示されている（ヨフコバ四位・稲葉・久保田 2020 : 94）。『日本語参照文法』は、「は」と「が」に限らず、初級の全文型（たとえば、「V ている／V である」、理由の「から／ので／ため」、条件の「と／たら／ば／なら」、「受け身／使役／使役の受け身」、授受動詞、概言モダリティの「そう／らしい／よう」など）に対して、類義表現との使い分けに特化した記述を行っているため、学習者のそうした要望に応える、学習に有用なリソースであるといえる。

Funkcja 1: Podmiot (mianownik)

Użycie 1★: Podmiot (mianownik) = nowa informacja

Podmiot = nowa informacja / Orzeczenie = stara informacja

Przykład użycia funkcji 1:

Przykład 1. Tanaka-san
Przykład 2. Dzieci bawią się w ogrodzie

Gramatyka i wzorce

• Częstka „wa”

Przykłady wzorców

Przykład 3. Tanaka-san **jest** nauczycielem.
Przykład 4. Dzieci **bawią się w** ogrodzie

Różnice w gramatyce i wzorcach zdań wymagające innego zastosowania niż Funkcja 1 Zastosowanie 1:

Partykuła [ga] : ① **Podmiot = nowa informacja (QW na temat podmiotu)** / Orzeczenie = stara informacja
② **Zdanie = nowa informacja**

① **Tanaka-san** **jest nauczycielem** . ← **Kim** jest nauczyciel?
Podmiot Orzeczenie
Nowa informacja Stara informacja

② **Dzieci bawią się w ogrodzie** . ← **Kto** bawi się w ogrodzie? Podmiot Orzeczenie **Nowa informacja** Stara informacja

② Dzieci **bawią się w ogrodzie** . ← **Co się dzieje** ?
Nowe informacje

Partykuła [wa] : **Podmiot/temat = stara informacja / orzeczenie = nowa informacja (Znak zapytania na orzeczeniu)**

Tanaka-san **jest nauczycielem** . ← Czym jest Tanaka-san ?
Podmiot Orzeczenie
Stara informacja **Nowa informacja**

Dzieci bawią się w ogrodzie CorobiądziedzieciGdziedzieci?
Podmiot Orzeczenie
Stara informacja **Nowa informacja**

Użycie 2★★: Niespodzianka

Przykład użycia funkcji 1 i 2:

Przykład 5. O, jest mysz ! ← Niespodzianka

図 8 「「が」の機能 1」 (ポーランド語訳)

おわりに

日本語学習者にとっては、助詞「は」と「が」のような類義表現の習得や運用は難しい。そのため、学習者はそういった表現の運用に役立つ明確な解説を求めている。しかし、既存の教材の多くは学習者のニーズには十分に応えていない。一方、教室での指導および使用教材には限界がある。特に、直接教授法を前提として作成されている日本国内の多国籍クラス向けの教材が提供できる情報には限りがある。海外で作成・使用されている教材には、学習者の母語で文法説明を提示できるという利点があるが、その教材が想定している言語が母語の学習者にしか理解できないという欠点がある。

このような教材状況を改善すべく、学習者のニーズに対応し、かつ多言語に対応できる普遍的な補助教材の開発が重要である。本稿で紹介した『日本語参照文法』は、特にニーズが高い初級文法の学習に役立ち、また類義表現の学習および運用の問題解決を目指した補助教材として開発された。

Author Contributions

The author confirms the sole responsibility for the conception of the study, presented results, and manuscript preparation.

Conflicts of Interest

The author declares that they have no conflict of interest.

参考文献

天野みどり 1995. 「「が」による倒置指定文」. 『人文科学研究』 88: 1–21.

市川保子 2006. 「日本語の誤用研究」. 『国際交流基金通信』 16: 14–15.

上林洋二 1988. 「指定と措定—ハとガの一面—」. 『文芸言語研究』 14: 57–74.

尾上圭介 2001. 「文核と結文の枠—「ハ」と「ガ」の用法をめぐって」. 『文法と意味I』. 東京都: くろしお. 15–149.

久野暉 1973. 『日本文法研究』. 東京都: 大修館書店.

三尾砂 1948. 『国語法文章論』. 東京都: 三省堂.

三上章 1953. 『現代語法序説』. 東京都: 刀江書店. (1972 復刊. 東京都: くろしお).

野田尚史 1996. 『「は」と「が」』. 東京都: くろしお.

ヨフコバ四位エレオノラ、稲葉和栄、久保田美子 2020. 「日本語文法教育をめぐる」. 『日本語教育連絡会議論文集』 33: 85–108.

ヨフコバ四位エレオノラ、久保田美子、稲葉和栄 2021. 「海外の日本語教材のデータバンク作りーヨーロッパで開発・出版された教材の分析ー」. 『日本語教育連絡会議論文集』 34: 62–90.

ヨフコバ四位エレオノラ、稲葉和栄、久保田美子 2022. 「海外の日本語教材データバンク作りー中央アジア、南アジア、中東の事例からー」. 『日本語教育連絡会議』 35: 74–102.

Slobin, Dan, Ayhan Aksu 1982. “Tense, aspect and modality in the use of the Turkish evidential”. In: Paul Hopper (ed). *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. 185–200.

教科書・解説書一覧

グループジャマシイ編 2015. 『日本語文型辞典』. 東京都: くろしお.

国際交流基金編著 2013. 『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1』. 東京都: 三修社.

国際日本語普及協会 2008. *Japanese for busy people I*. 東京都: 講談社インターナショナル.

嶋田和子監修 2011. 『できる日本語 初級』. 東京都: アルク.

友松悦子、和栗雅子 2004. 『初級日本語文法総まとめポイント 20』. 東京都: スリーエーネットワーク.

『みんなの日本語』 初級 I 2012. 東京都: スリーエーネットワーク.

『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』英語版第 2 版 2013. 東京都: スリーエーネットワーク.

坂野永理、池田庸子、大野裕、品川恭子、渡嘉敷恭子 2013. 『げんき』 I. 東京都: The Japan Times.

El japonés fácil 2004. Dublin: Editorial de Vecchi.

Makino, Seiichi, Michi Tsutsui 1986. *A dictionary of basic Japanese grammar*. 東京都: The Japan Times.

Maynard, Senko 1990. *An introduction to Japanese grammar and communication strategies*. 東京都: The Japan Times.

Xalmurzayeva, Nodira 2005. *Yapon tili*. Toshkent: ZARQALAM.

URL 一覧

機能語用例文データベース『はごろも』 <https://hagoromo-text.work/> [閲覧日 2025 年 10 月 30 日].

多言語母語の日本語学習者横断コーパス (IJAS) (データバージョン 2024.03) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> [閲覧日 2025 年 10 月 30 日].

寺村誤用例集データベース <https://www2.ninjal.ac.jp/teramuradb/> [閲覧日 2025 年 10 月 30 日].

日本語参照文法 <https://sansyo-bunpo.net/> [閲覧日 2025 年 10 月 30 日].

日本語文型バンク <https://bunkeibank.ninjal.ac.jp/> [閲覧日 2025 年 10 月 30 日].